

【福島大学むらの大学アーカイブ19】 【川内Chapter6】

## 公務員の視点から見た

### 震災の記憶

秋元賢さん



#### 【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 10月12日・秋元さんご自宅

第2回インタビュー 10月30日・秋元さんご自宅

#### 【聞き手】

人間発達文化学類 大浦理莉子

行政政策学類 上野晴加 白戸逞寛

担当教員 千葉偉才也

#### プロフィール

秋元賢さん

川内村生まれ。大学卒業後、川内村役場に勤務し、震災当時は、川内村保健・福祉・医療総合施設である「ゆふね」で保健福祉課長を務めた。

## 1. 震災前の川内村

**秋元さんが子どもだった頃の川内村は今と比べてどのような地域だったのでしょうか。**

秋元賢：今より子どもが多かったよね。保育所が3施設、小学校が3校、中学校が1校で中学の同級生は150人位いた。活気はあったよね。スマホやゲームが無い時代だったので、外で遊ぶのが普通だったから、夏場は山に行つて蔦につかまってターザンごっこや冬は田んぼの氷で下駄スケートなんかをやってたな。今思うと原風景を残した里山にお恩恵を受けて、不便だったけど楽しく生活していたと思う。さらに地域の人との繋がりも強くお祭りや天神講などコミュニケーションが良く助け合いの精神があったな。子供の頃は自然のなかでゆったりと過ごした感じでした。

また、今は、保育所が無料だし、高校に通学するのに補助金をもらうとか、下宿すると手当をもらうとか、そういうことをやってるんだけど、昔はそういうのは一切ないよね。だから親は大変だったでしょうね。中学を卒業すると大体の人は川内から出て下宿しながら高校に行くから。

**秋元さんが役場に入職した時期の川内村について教えてください。**

秋元賢： 大学出て、戻ってくるつもりはなかったんだけど、長男だから仕方なく戻ってきて、役場の試験を受けて役場に入ってずっと。別な所で就職してもいいなと思ってたんだけど。あの当時は何をやるにも地域のつながりはあったと思う。スポーツ大会は野球、バレー等地域ごとや職場対抗等、野球の盆大会等川内村で20チーム以上出場するんだからすごかったよね、戦後から始まったとのことで、朝日スポーツ賞も頂いた位だから、あとは、産業文化祭が毎年秋に開催させていて子供の作品展示や野菜等展示され最後の販売会が賑わっていた記憶があります。

**役場ではどんな部署で勤務されていたのですか。**

秋元賢：最初は建設課土木係にいて、そのあと財政課税務係に5年程いたかな。村民の確定申告を取ったり、固定資産税を賦課するのに家屋調査をやったり、その後住民課保健衛生係で保健師の事務処理や畜犬の仕事をやりながら、途中、東北大学で社会教育主事の資格を取って、それからしばらくしてから公民館に異動になり社会教育や福島駅伝も担当した。今、公民館は教育課の中にあるけど、昔は公民館って課として独立してたの。公民館長は、課長職で係長、職員もいたので公民館の業務は相当手広くやっていた。当時は、野球の盆大会や村民運動会等は地域ごとに練習をして本番に挑むわけですからか活気はありましたよ、また、青年が集まってのいろんな事業は積極的だった。青年学級なんかは、学級生自ら事業を考え実施していましたから楽しかったですよ。たとえば、他町村の青年との交流、スキーやテニス等のスポーツ活動、キャンプ等のアウトドア等結構ありましたよ。後は総務課の財政係と企画財政部門に8年いました。村の予算や財政分析などを担当しました。その後震災当時に保健福祉課、そして総務課で退職しました。

**当時の主要産業は何だったんでしょうか。**

秋元賢：やっぱり農業だよな、米、畜産、乳牛それと林業が多かった。

震災後は、放射能の影響で畜産は無くなり乳牛だけ、米や林業も縮小しましたね。震災後、牛などは殺処分だったから農家の方々は辛かったと思いますよ。

**原発ができてからは、村から浜のほうに、勤務される方とかも、一定程度いたのでしょうか。**

秋元賢：生活の糧にするのには、村で仕事するよりは、東京電力関係の原発関係の仕事ほうが賃金がいいので、多くの方が仕事に行っていたはずですよ。

俺が高校の頃、下宿してた最初の頃は下宿代が安かった。ところが近辺に原子力発電所ができるようになったら下宿代が値上がりしたの。従業員が増えてバブルみたくなった。そういう記憶はある。だから双葉町辺りは生活環境が変わったと思いますよ。

## **2. 震災と原発事故後の避難生活**

★震災当日の状況

**2011年3月11日は、賢さんはどこで何をされていたんですか。**

秋元賢：定例議会が終わった日なんですよ。翌年度の当初予算が決議になって、議場でちょっと雑談をしていたら、大きな揺れが来て議長席の天井のスピーカーが議長席に落ちた。誰かがその机下に避難していたと思う。揺れがひどくなってきたので、これはまずいなと思って外に出たら地面が割れそうな感じがした。

**当時は何を担当されていたのでしょうか。**

秋元賢：保健福祉課長だったので、勤務先は役場でなく「複合施設ゆふね」で保健、医療、福祉を担当してました。

★川内村からの避難と対応

**3月11日以降の行動を教えてください。**

秋元賢：まずは次の日から、職員で川内の地震の被害状況の調査をする手はずだったんだけど、ところが、そのあとに富岡からどんどん川内に避難する車が数珠つなぎなんで、ゆふねから役場へも移動できない状況でした。

被害状況を調査するどころか、富岡住民の避難を応援するための仕事になりました。ですから議会が終わってからビックパレットに避難する16日まで家にも帰らずゆふねに泊まって対応していました。

俺はその時、原発が危ない意識は全然なかったですね。避難した富岡の人もたぶん分からない方もいたと思うのね。富岡から避難して来る人が、警察が防護服を着て理由も言わずに避難してと言うから、どうしたんだろうな、2、3日いれば戻れるんじゃないかということで避難してきたようだった。

### **ゆふねは3月11日以降どういう状態になっていたんですか。**

秋元賢：複合施設ゆふねは、行政の保健福祉課と国保診療所と、あと社会福祉協議会が入っているわけです。ゆふねは、一般の避難者を受け入れしないで県立大野病院の入院患者とスタッフ、富岡の今村病院の入院患者とスタッフだけを受け入れました。一般の避難者は村内の公民館や体育館等に避難しました。

川内村は停電にならなかったの、ゆふねは暖房が効いていましたから入院患者には良かったはず。食材は病院側でも持参していたし、村民からも食材を頂いて病院の栄養士・調理師が食事をつくっていました。体育館、公民館とかに避難した人は寒さ等で大変だったでしょうね。

### **運営の責任者をされていたのですね。**

秋元賢：そうですね。診療所で患者を受け入れるのにも大変でした。玄関前で広域消防の方が、線量計で放射線量を測って、施設内に入れるかどうか判断するわけですが、その判断規準が判らない、診療所の先生と相談しどのようにするか考えましたが、結局は県に問い合わせた対処しました。

この未曾有の災害の時、原発に一番近い場所で診療している所へ国あたりから放射線対策の指示があっても良かったのではないかと感じてました。

診療所にはひっきりなしに富岡や川内の住民が受診に来てまして、富岡町の医師や大野病院の先生方にもお手伝いしていただきました。避難して来た方は、保険証も薬も持ってきてないで受診するでしょう。うちのほうは国保診療所なのでそれほどキャパが大きいわけじゃないから、薬を出し続けたので薬は底を突くような感じでした。そんな感じで過ごしました。

夜には集会所に避難していた方が亡くなり死亡診断に医師を連れて行ったこともあります。

### **その対応をしている最中に、川内も避難しなきゃいけないという状態になった。**

秋元賢：あの状況だから大野病院は、次の避難先を探していて入院患者を避難させる段取りをしていました。当時携帯電話が使えず、施設の公衆電話を使って連絡していたようだった。お金がもう満杯で入らない、それも取りながら使っていた。ゆふねに衛星電話を1台持ってきたけど、衛星電話も使いながら新たな避難先を探していて、2、3日くらいで大野病院は移動した。

今村病院も同じころ別な場所へ避難しました。

その後、田ノ入地区の住民を村でゆふねに避難させました。

16日に川内は避難したんだけど、診療所の先生がその前に、「もうこれは避難したほうがいいよ」ということで、たぶんその前に診療所は閉鎖してる。

**自主避難を含めてだと思っんですけれども、若い職員には保健福祉課でもそういう判断をされたのでしょうか。**

秋元賢：役場全体でどうだったか、役場に行っていないから分からないけど、ただうちのほうの職員については、道路が混む前に避難してと言って避難させたの。当時、保健福祉課は診療所も含めると、15、6人位いたのかな、社会福祉協議会もあったから、結構な人数がいたね。

最後、俺と社協の局長が残って、じゃあそろそろ行くかと言ったときに、高原の家というグループホームがたぶん避難出来ないでいたと思っていたので、グループホームに行ったら、やっぱり避難しないでいたの。これはまずいと思って社協で持っているマイクロバスのカギをグループホームに持って行って、「これでビッグパレットまで逃げて」と言ってビッグパレットに避難してもらった。

**賢さん自体は、いつまで川内におられたんですか。**

秋元賢：たぶんあのとき、16日に避難するときは、役場職員の課長、係長を主に19人しか残ってなかったと思う。ゆふねの若手職員は早めに避難させたので俺と社協局長だけ残ってた。一旦家に戻って避難準備したが、家族はすでに避難していてどこに行ったか分からなかった。

役場のトラックに毛布をぎっしり積んで、ビッグパレットに先発隊で行って、川内の住民がマイクロバスでピストン輸送でビッグパレットに来るでしょう。それを向こうで待ち受けた。

**村が避難を決めた後の雰囲気はどのようなものだったのでしょうか。**

秋元賢：議会と区長会に説明して避難を決めたんでしょうが、避難が決まる前にテレビで建屋の爆発を見てこれはやばいんじゃないかと思っていたら、たくさん来ていたメディアも警察も突如いなくなっちゃって、だから、残ってるのは川内と富岡の住民だけ。あと誰もいないそういう状況が、いつだったか。雰囲気としては異様な空間、変な静けさというか、いよいよかというような感じがあるよね。あららら、どうしようって。

**★ビッグパレットに役場機能に移してからの状況**

**保健福祉課は避難所となったビッグパレットの衛生管理なども担当だったのでしょうか。**

秋元賢：行政の機能はビッグパレットの外にプレハブを建てて仕事してまして、われわれはビッグパレットの中のコンベンションホールに医療班として、一緒に避難した富岡町の保健福祉課と川内の保健福祉課が合同で医療を担当してました。川内は診療所を運営していたので看護師がすぐ動け

たので富岡の医師のもと活動しました。医師は富岡町の井坂先生が中心となって診察してもらい、あとは坪井病院から藤岡先生も仕事合間や夜に診てくれたりしてました。さらに全国からDMAT（災害派遣医療チーム）が切れ目なく応援してくれました。

運営は両方の保健師が中心となって富岡と川内の職員の出勤日とか、24時間態勢のシフトを作って救護所を運営していた。

一緒に避難した社会福祉協議会は、これから社協をどう運営して行ったら良いか悩んだ時期もあったが、結局、行政の介護班を担って高齢者のお世話をすることとなり、9月に開所するあさかの杜サポートセンターへ引っ越すまで、ビックパレットで高齢者対応やボランティアセンターを運営していました。

子供達もどうしてよいか分からずにいたので、救護所の一角にマットをひき詰めて子供教室を始めました。その後は一般のボランティアの方が継続してくれるようになりました。

**休めるような状況ではなかったのでしょうか。**

秋元賢：避難した当初は、うちのほうの職員もまだ避難してまだビックパレットに集まっていなかった。なので県の介護保険や保健衛生部門といろいろ調整しながら避難した住民がより良い生活できるような調整をやってました。「この人はこっちの施設は無理だから、どこどこに送らなくちゃいけない」とか言って、大阪の親戚の近くに送ったりとか、そういう手はずを職員が揃うまでやってました。

保健師が戻ってきてからはビッグパレットの救護所は保健師中心で運営しました。救護所は住民と同じコンベンションホールにあり、さらに三交代の24時間態勢で対応をして、そのフロアの床に毛布を敷いて寝るのでなかなか寝れなく大変な日々を過ごした。

そのうちコンベンションホールと2階の中間に部屋があるのが判って、そこに頂いたキャンプ用テントを張って布団敷いて救護班の職員を交代で休ませることができた。

**感染症の感染などもあったと伺いました。**

秋元賢：ビッグパレットって1階から4階まであったでしょう。最初の考えは、1階には高齢者、2階、3階には動ける人を本当は避難させたかったわけです。なるべく高齢者で動きが悪いような人はコンベンションホールの救護所のそばに置こうと、そういう段取りでいたけど、結局はサーベイをやって中に入れるようになると、われ先に場所を取っちゃう。そうするとそこから動かないわけ。それもどうしようもなかったんだけど。

2,000人以上の避難者がいて衛生管理が十分でなかった為、ノロウイルスや急性胃腸炎が発生した、発生した時、北海道の医療チームと保健所の指示の基、トイレや洗面所の衛生管理、換気等素早い対応をして、さらに観察室を設けて患者を離したので大規模に広がらず収束した。それも医療班としては大変だった。あとは結核が出たときはびっくりしました。これも大変だった。でもあの

結核の方は、罹患していてビッグパレットに来てからの発症したという感じだった。  
本当に保健師、看護師は相当大変だったでしょうね。

### 3. ペットとの避難生活

**避難所運営で特に難しかったことを教えてください。**

秋元賢：問題は避難所で人間だけじゃなくてペットを飼ってる人たちをどうするんだということ。実は大玉村に、溝口俊夫さんという知り合いの野生動物の獣医がいるんです。避難してすぐ電話をくれて、ペットを飼ってる人はどうしている、車中で過ごしているのではないかと。

早速溝口獣医とボランティアの方と駐車場を回りペット同伴の人たちを把握して、ペットを飼っている人をどうにかして中で生活させる段取りをしました。

ビッグパレットの館長と相談をして、ペットを置く場所を提供してもらった。そこでは、ペットを預けた人が順番を決めて、「ふんの始末とか掃除を全部自分たちでやる」ことを決めて始めました。

その場所もしばらくして、「洗濯機を置く場所になるから、ここを移動して」と言われ、その時、ちょうど郡山保健所の石川弥恵子課長が来ていて何が足りないものありますかと。ペットを移動させるための「テントとケージと、そういうのが全部足りない」ということで手配して頂いた、テントをビッグパレットの北側に立てて、さらに全国から集まった物資でそこでお世話をするとということになった。

**過去の阪神淡路や中越などでもそうした対応はあったのでしょうか。**

秋元賢：現在、国は災害時のペット同行避難を推奨しています。きっかけは、やはり阪神淡路大震災だと思えます。中越の時はある程度出来上がっていたと思えます。ビッグパレットのペットの収容施設は溝口獣医のおかげで素早く立ち上げが出来た。そのあとに溝口獣医と一緒に、国際動物福祉基金（IFWA）がペットの避難状況をどのように対応してるか視察に来ました。この人たちのお話の中で、避難所でペットを虐待している所を子どもに見せちゃいけない、なぜなら成長過程で虐待の様子が悪影響をあたえるから避難所でなくても子供には見せてはいけないと。だから避難所のペットはきちんと管理しないという話をしていました。

災害があったときのペットの避難は一緒に考えないと駄目だということです。

ビッグパレットから仮設住宅に移ったときも、ペット用の部屋もエアコン付きで作ったはずですが。

**避難の中でペットへのケアは見落とされがちに感じています。**

秋元賢：ビッグパレットの場合は全国から支援者の方が入って「この日はシャンプーとカットをや

りますから」って言って案内チラシを配ったりしてました。結構ペットへの応援はありました。

#### **避難所にペットを置いたときの専門的な対応はどうされていたのでしょうか。**

秋元賢：それは、郡山市保健所の石川獣医さんが結構連絡くれて、相談事項はそちらに回したりしました。あとは、市内の獣医師会の方々が相談会を行っていました。

#### **ペットへの支援は全国規模の団体などが行ったのでしょうか。**

秋元賢：いろんな団体が来ていろいろ世話をしてくれたり。あとは郡山の獣医さんも来て、犬のケージや餌とかを支援したり。

困ったのは、川内や富岡に置いてきた犬とか猫を連れ去る人がいる。連れ去っちゃって、それをネタに飼い主に連絡して、保護してた期間、結構「お金かかったよ」かかったよと。今まで世話していたからその料金を頂く等悪徳な団体もいたようです。

## **4. 避難からの帰村**

#### **賢さんのビッグパレットでの避難生活はいつまで続いたのでしょうか。**

秋元賢：ビッグパレットの事務室に川内と富岡の事務ブース「机2台」があり夜は机の下に毛布を敷いて寝ていた時が多かったけど、5月中旬にアパートに引っ越ししましたから、それからはアパートから通勤していました。

#### **村民のみなさんも近隣にできた仮設住宅に移り出すタイミングだったのでしょうか。**

秋元賢：市内3か所に出来た仮設住宅に6月中旬に引っ越しを始めました。

仮設住宅入居に関しては、川内村は抽選でなく、なるべくコミュニケーションが取れるように、地域ごとの人を集めた。比較的コミュニティが維持できるような感じで入居させたようです。

9月に高齢者サポートセンターを作って、そこで社協がデイサービスとかを始めて高齢者をお世話する。その後、近くに仮設住宅内に診療所を作って村民の利便を図った

一番の問題は、川内では一つの家族で子ども、親、じいちゃんばあちゃん、こういう世帯で暮らしていたのが、仮設住宅は高齢者2人で住むのがちょうどくらい。家族全員では住むスペースがないでしょう。そうすると、仮設住宅には高齢者、若い夫婦と子どもたちはアパートになる。ここで世帯が分離するわけでこれが今に続いているわけです。

世帯分離するでしょう、そうするとどういう状況になるかというと、今まで若い世帯が高齢者の面倒見ていたのが今度は見れなくなる。高齢者は、自分たちだけでは生活するのが大変なので介護認定を受けるようになる。たしか震災の年の川内村の介護認定の人数は175名だったはずと思う。こ

れが、そういう状況になってから一気に介護の認定率が増えた。あの当時、たぶん17ポイントくらいの介護認定率が、震災後一気に24とか25ポイントぐらいに上がった。結局は高齢世帯だけで生活するようになったから、介護認定を受けて何らかの介護サービスを受けるということになる。それが今だに続いているわけ。だから介護保険料は上がる。一時期、介護保険料が双葉郡内8町村は、全国ワースト上位に入ってた。仕方ない部分だけど、家族構成が変わるといのは大きかったよね。

### **若い世代は戻らないという選択をするということでしょうか。**

秋元賢：どうなのでしょうね。いまだに川内に戻ってきてない家庭というのは子どもがまだ高校が終わらないというのが大きな要素だと思います。

あるいは、仕事が避難先である為川内に戻れない方もいるのでしょうか。

それぞれの家庭で色々な状況があるのでしょうか。

### **賢さんも役場機能を村に戻すタイミングで戻られたのでしょうか。**

秋元賢：4月から役場機能を戻すということで川内に戻ってきた。3月に家の掃除をしにきたら、寒くて水道が破裂してた。しばらく郡山にいたから分かんなかったけど、凍ったところにまた水だから、ドアを開けたら水が溢れてきた、フローリングも色が剥げたり色々大変だった。

### **帰村のタイミングも保健福祉課に所属されていたのでしょうか。**

秋元賢：そうです。保健福祉課にいたんです。保健福祉課としては再開に向けてどうするんだという話になった。まず医師が必要なんだろうという話をした。震災前より医療体制を良くしたかった。高齢者が多く戻ることから診療科目をどうするか、課内の話し合いで、整形外科、眼科、心療内科は必要。県にお願いしてもなかなか見つからない、それぞれの職員のつてを使って何とか医師を確保した。あと問題は、当時の内科の先生が辞めるということ。先生に辞められると困るよね。代替りの先生を見つけるのが大変だ。たまたま、富岡町で脳神経外科をやっている先生がお手伝いしてもいいということで何とか体制を整えてやった。

それと老人施設の必要性もあり、ひらた中央病院にお願いしての特別養護老人ホームの誘致も段取りができた。それから、高齢者が診療所で対応できず、大きい病院に行かなくちゃいけない人が出てくる。「そういう方々をどうするの？ あるいは村の診療所まで来れない方々をどうするの？」ということで、外出支援サービスの段取りのためにワゴン車を購入して対応しました。対象者はその家庭で誰も運転できない世帯で診療所や役場、金融機関に行きたいという人を、タクシー的な感じで手助けする。それも結局国補助金で対応しました。あとは、村外の医療機関に行かなくちゃいけない人がいた。そういう方についても送迎していく段取りを取りました。それが今も続いているわけです。その時の問題点は「村外の医療機関はどこまで送迎できるか」という点だった。国

と村のやりとりで、「被災12町村だけを対象にしたらいい」ということになった。つまり、川内と被災町村だから、いわきの病院とか郡山とか三春の病院は行けない。この辺で行けるとすると双葉郡と、あとは船引、行ける場所は結構限られている。小野町には公立小野町地方総合病院があるけど、被災12町村じゃないからそこにも行けないんだ。でも川内村は、公立小野町病院の構成団体なわけ。その公立小野町病院というのは、小野、川内、いわき、田村市、平田の5市町村でつくっている病院だから、そこは何とか認めてほしいって村は国と交渉した。「そこはいいでしょう」となった。

今は主に小野の公立病院に連れて行くことが多くなった。

最初は内科と整形外科、眼科も来るということになっていたから、「それ以外の診療科目にしてね」と国から言われた。「内科とか整形とか、そういう村でできるもの以外の診療科目ならいいよ」ということなんだけど、そんなわけにはいかないよね。ということで、そこもOKをもらって今に続いている。

いま国の補助事業でやってるんだけど、補助事業もいずれ無くなるわけだから、そうなった時に、村民の足をどうするかが課題です。今は社協でやってる部分と、診療バスあとはエナジバスとエナジアという会社が、川内に太陽光パネルを設置してその見返りとして、村内を運行するバスを手配してくれるということになった。今は三つの事業ががいろんな形で動いて住民の足になっている。

村では、この三つの支援バスをどうにか一本化に出来ないか段取りしている。

#### ★帰村と住民の葛藤

**帰村に向けた住民説明会を数多く行ったと伺いました。**

秋元賢：この説明会は、住民からの様々な意見があり、もう戻るまでに、住民説明会は相当やります。説明会は、戻ろうと言う人は少なくて。「なんで戻るんだ」と言う人が多かった感じがしました。

郡山のビッグパレット周辺の集会所でやって、放射線の話出されても分かんないでしょう。そうになると、やはり長崎大学の高村先生、東京大学の坪倉先生に来て頂いて説明するんですが納得しない、あの当時の説明会は大変だった。

**「科学的に安心ですよ、安全ですよって、そういう専門家が言っても、収まるものじゃない。」**

秋元賢：収まるものじゃないよね。ましてあの当時、世界の山下といわれる山下先生が、県知事に頼まれて来たわけでしょう、何とかしてくれと。山下先生が、「そんなに大げさにしなくても、放射線は大丈夫だよ」って、福島事故はチェルノブイリと全然違うんだから、それほど気にしなくても大丈夫だというのを、山下先生なりに「笑ってれば放射線逃げるよ」みたいなことを言うから

たたかれたんだけど。山下先生の言うとおりでなと思うけどなかなか大変でした。

やはり放射線に我々も無知であるから、小学校から放射線教育をして知識を高める教育を国としてやらなければならないと思った。国民が放射線のリスクコミュニケーションの知識があれば風評被害もある程度防げると思います。

#### ★行政側の苦勞

当時も浪江町役場に勤めていた父からは、詳しい話は何も聞いていません。浪江の町役場に今でもずっと勤めています。こういう話を聞くと、当時の父が少し見えます。この前、「行政の側が、避難した住民から結構ひどい言葉をかけられてる」ってお話聞いたときに、真っ先に父のことが浮かびました。表に出さなかった父がどんな思いだったか、言葉にならないです。

秋元賢：大変だよ。震災後は特に立地町村では大変だったと思うよ。課長に昇格するというと辞めると言う人がいると聞いた。課長という立場は大変でしょう、議会对策や対住民への説明、特に住民説明会等では矢面に立って話を聞いて説明しなければならないからね。

## 5. 川内村のこれから

村に戻られてから福祉分野の課題などはどのようなものでしょうか。

秋元賢：ゆふねは原発から20キロの線引きなの。ということは、20キロ圏内の人と20キロ圏外の人が行政内にいることが問題で。特に賠償金のことや追加賠償金があったでしょう。忘れた頃に追加で賠償されても、余計住民の感情は悪くなる一方だよ。かえってないほうがよかったかな。国の線引きもいいけど例えば町村単位で線引きするとか。そうしないと行政がやりづらくてしょうがないと思う。第5行政区は区の中で線引きされてるから区長は大変だったでしょうね。これはずっと言われるよね。何をやるのにも大変、大人だから言葉には出さないけど近辺の方は根に持っている人多いと思うので。

町村単位で決まっていればまだそれほどでもないんだけど、川内みたいに線引きされちゃうと、これは何をやるにしてもずっとしこりが残る。ここが大変かな。

あとは、親子の関係だね。一つの家族でなくなって世帯分離している。人口は減っているのだけど世帯が増えてるという状況だから。人口が減っているのに世帯は増えるって変でしょう。

結局は世帯分離しているから世帯の数は増える。だけど人口は減っている。

そうしてだんだん高齢化率が上がって50パーセント近くになる、県内トップクラスでしょう。

あとは介護保険料が1年か2年前かな、郡内8町村が全国トップ10ぐらいに全部入っていたでしょう。結局、医療費、介護保険が無料だから、制限なくお医者さんにかかるわけでしょう。これが今後、自分で払うようになると困る人も出てくるでしょうね。介護認定受けている人が、デイサービ

スに週3回来ていたとするでしょう。いまは無料だからいいよね。これが今後、週3回は金額的に無理だよ、週1回にしようかなということになるとそれだけ介護サービスを受けられなくなって、生活自体もままならなくなると。これはちょっと考えなくちゃいけないとこかな。そこを、どうにかしたいっていうのがあるんですけどね。そうした話を以前その時期から来ていた「むらの大学」でも話したことがあります。

**「むらの大学」は、2014年から川内村で実施させていただいています。**

秋元賢：あの頃、何年か来て、社協からもお話しして欲しいっていうことで何回か話をしたことあます、そのときに学生のほうに、「福島の基幹大学である福島大学は、川内の今後をどういうふうにしたら良いかを話し合った結果を次に来る人に繋いでまた来てね」ってお願いをしたの。

高齢者が生き生きと生活できるような案を、若い大学生が来て一緒にやったりしてくれれば良いなと思って話をしました。

例えば、静岡とかお茶所でしょう。あそこは縁側カフェやってんだよね。週末だけでもその縁側カフェをやると、高齢者のちょっとしたお小遣いになるわけ。来た人に、縁側でお茶と地元の漬物を出してお客さんに食べさせる。ワンコインで、どうぞっていうのをやっているわけ。

そこを目当てに、結構な観光客が来るようになった。ってことは、その高齢者は、自分の作ったお茶と、漬物を出していると、10人来れば、5,000円になるわけでしょう。結構なお小遣い稼ぎになる。それを週末だけやってる。縁側カフェって良いでしょう。

そういうふうなことを、福島大学の学生と一緒に来てこの場所でやれば良いとアドバイスして欲しい。川内の人、どこの場所がいか分かんないけど、他から来た人なら「この辺りでやれば良いよ」と言って、そういうのを一緒にやる。例えば高田島なら、車が駐車出来るようなところで、縁側カフェののぼりを作って呼び込んで、高齢者のちょっとしたお小遣い稼ぎをできるようにしたい。それも毎日じゃなくて週末だけとか。

川内の道路が良くなってきたので、いわきや小野町から来る人も結構いるのでそちらの方でも出来ればいいね。そして、そういうことをやってると学生の方から発信してくれればいいね。そうやってくれると高齢者が一生懸命になる。そうするとカフェの準備が忙しく、病院に行ってる所じゃなくなるから、それは結局村としても医療費を削減することにつながる。また生きがい作りになる。

これらを福大の学生の方と高齢者が一緒になって、「どう、やろう」というふうになって、川内の何カ所かでやっていければいいね

無理のない範囲でやればいいね。

川内村は、昔から用事がない人は川内村を通らないわけだから、そういう所に来ていただくのにはこういった方法もいいかなと。

社協にいるとどうやって高齢者の生きがい作りやいかに健康で過ごせるかとか特に思うの。  
高齢者の健康維持、健康寿命を延ばす事にもつながるのでぜひ実現したい。

#### 【担当学生感想】

迅速なペットへの対応や、公務員ならではの視点のお話が特に印象に残りました。ペットの居場所を確保することで、ペットの家族の精神的・身体的負担も軽減されたと感じます。震災当時、保健福祉課長という立場の賢さんだからこそ見えた川内村の状況や、人々の健康管理に尽力した職員の方々の苦勞から、公務員としての強い責任感が伝わってきました。特に、ビッグパレットへの避難や放射線の影響への対応など、未曾有の事態にも冷静に対応されたことが分かりました。さらに、帰村後の地域コミュニティや住民の生活再建に向けた取り組みは、今後の有事にも活かせる貴重な教訓だと感じました。（上野晴加）

今回、実際に川内村を訪れてインタビューを行ったが、現地でしか学べないことがあるのだと感じた。賢さんのお話は、初めて知ることも多く、特にこれからの川内村についてのお話が印象に残った。高齢化や医療費の高騰は、川内村だけでなく、地方自治体において問題になってくることだと思った。そのなかで賢さんがおっしゃっていたように、大学生と地域の方々が協力して事業を行うことができれば、地域の発展にもつながると感じたので、これからもそういった活動に関わっていききたい。（白戸逞寛）

賢さんのインタビューで特に印象に残ったお話はビッグパレットでのペット対応のお話と公務員ならではの苦惱のお話です。私は猫を2匹飼っているのですが、災害時に避難を強いられる状況になったらどうすればいいのかとても不安を感じています。ペットは家族同然の存在なので、一緒に連れていけないという選択肢はありません。賢さんの迅速な対応は、ペットと一緒に避難してきた方からすれば一種の安心に繋がったと思います。また、公務員としての賢さんが避難者の方からかけられた言葉についてはショックを受けました。避難者のために避難所の運営に励み、不安な状況下で仕事をしているのにも関わらず「公務員は職を失わなくていいな」などという言葉がかけられたというお話はつらいものでした。震災当時賢さんの視点で体験したことを教えてくださったこのインタビューの時間はとても貴重な時間でした。当時を生きた人の声をきいて記録として残していくことの大切さを実感しました。（大浦理莉子）